

「自信をもたせ『確かな学力』を付ける」

教育研究所所長補佐兼企画係長 味澤博昭

小学校低学年の体育の授業を参観する機会があった。授業の内容はマット運動遊びである。先生の指導にはリズムがあり、どの子も楽しく運動をしていた。改めてクラスの子どもたちを見渡すと、どう見ても運動が苦手であろうと思われる児童がいる。その子の活動の様子をしばらく注意深く観察した。すると、「みんなでマットを運びましょう」と言う先生の声に、その子は、私の予想に反しマットのところまで駆け足で移動した。むしろ、他の子どもたちより素早い行動であった。さらに驚いたのはその子は自信をもって体を動かし、色々な運動をこなし楽しく取り組んでいた。

たぶんこの先生は、児童一人ひとりの技能や興味・関心などについての確に把握し、「できないことができるようになる」個に応じた授業実践を行っているのだと推測できる。短時間の授業参観ではあったが、「分かった」「できた」と喜びを味わわせ自信をもたせる指導の展開が、子どもたちに「確かな学力」を定着・向上させるために非常に重要なポイントであることを改めて確認した。

教科指導における「確かな学力」は、基礎的・基本的な内容の確実な定着と、自ら学び考える力の育成としてとらえることができる。一つの授業を設計する場合は、本時の基礎的・基本的な内容を明確にすることが大切である。例えば、繰り返し指導などにより基礎的・基本的な内容をどの子どもにも身に付けさせることが、「分かった」「できた」という実感と自信をもたせ、さらに学習意欲へと結びついていくことになる。その上で、子どもたちに主体的に考えさせる授業展開を行い「思考力・判断力・表現力」や「問題発見能力」「問題解決能力」などの学力を育成することである。授業では、「児童生徒一人ひとりが毎時間、分かった、できたという実感をもてたか。また、既習内容と関連付けながら学習が進められたか。」などについて授業者はチェックしたい。